

---

# あめおんな番外編：雨雲の向こう側

黒作

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あめおんな番外編：雨雲の向こう側

### 【Nコード】

N5422Z

### 【作者名】

黒作

### 【あらすじ】

あめおんな番外編。久坂が嫌いな人は回避推奨です。久坂視点でもろもろ。

食器が苦手だった。

正確には、食器の割れる音が。

自分の参加している研究は地味極まりない。とてもじゃないけど普通科に通う女子高生の興味を惹くようなものには思えなかったし、他諸々踏まえて、いつも遅くまで見学していく安芸先生の姪御さんの目的が自分にあると気づくのは、そう難しいことじゃなかった。でも、しばらくは気づかないふりを続けた。

俺はモテるほうだけど、初めて付き合った彼女に笑えるほどあっさり捨てられて以来、恋愛ごとに関しては面倒が先に立った。それも相手は入学前から世話になってる恩師の姪御さん、受験控えた女子高生。慎重になるなって言うほうが無理だ。俺の性格も性格だし。

でも彼女、安芸はいい子だった。研究室のみんなの名前を覚えていて、いつもうれしそうに挨拶をしたし、本来いるべきでない自分の立場をわきまえていた。時々失敗して注意を受けても、素直に謝って、ふてくされることもなかった。安芸先生の姪を叱るなんて俺達の立場からするとこの上なく気まずいことだったから、叱られたあとも彼女が研究室で笑顔を見せるとほっとしたものだ。情けないっっちゃ情けない話ではある。

ばたばたと尻尾を振る子犬のような安芸がだんだんかわいく思えて来た頃、安芸先生がぼそっと、陽菜子はいいい子なんだよと言って来た。あんまり唐突に言い出したもんだから驚いたんだけど、不器用過ぎるおかげで先生の言いたいことはすぐにわかった。かわいがってる姪の相手として俺は合格だったのかと気づくとそれは純粹にうれしかった。

そんなに態度を変えたつもりはなかったんだけど、次に会ったとき少し安芸にやさしく接したら、途端に顔を真っ赤にして告白された。これまたの唐突っぷりに俺がぼかんとしていたら（なんだ血なのか）、安芸はあわてだして、言う順番を間違えたとかそんなつもりじゃなかったんだとか意味のわからない言い訳をすごい勢いでまくしたてはじめた。あ、間違いだったの？ いえ、間違いじゃないです！ 直後、自分の発言の意味に気づき、安芸は奇声を上げた。そんなに叫ばなくても。研究室のみんなに聞こえてると思うよ、これ。

気がついたら俺はげらげら笑っていた。安芸をかわいいと、心から思った。

食器が嫌いなのは、親のせい。俺が保育所の年長の頃、両親が大ゲンカして、母親が家の食器全部を叩き割った。

そのときは食器は買い直されたんだけど、俺はすっかり食器が怖くなって、食事のたびに泣いてぐずるようになった。母親はその原因が食器のぶつかる音だと気づかなかったみたいで、預け先の保育所でも家でも食事を嫌がる俺にほとほと手を焼いた。

もともと仕事をしたかった人だったから、袋から出した食べ物なら俺がおとなしく食べると気づくと、それを理由に弁当作りも食事作りも一切やめた。父へのあてつけもあったんだろうし、単純に家事の嫌いな人でもあった。そしてそれが原因で父親とまたケンカして、再び我が家の食器はすべて叩き割られ、二度と買い直されることはなかった。

俺と安芸はうまくいっていた。付き合いだしてから知った、安芸の子供好きなところや、ひとりぼっちの子を放っておけないところも好きだった。面倒見がよくて、こういう言い方って嫌われるらしいけど、おせっかいだけだいたい母親になりそうって思ってた。大勢で遊ぶことが好きだったから、安芸の周りはいつものにぎやかで楽し

かった。幼いと感じるところもあったけど、俺より3つも下なんだし、それはいずれ変わっていくと思えた。だから、悪かったのは俺なんだと思う。

風邪を引いた。会社に入って2年目くらいだったか、けっこう性質が悪くて、熱もかなり上がった。とはいえ、ひとり暮らしも長いし、枕元に大抵のものは揃っている。冷温シート、薬各種、食事用のゼリーにスポーツドリンク、栄養ドリンク。ウエットティッシュにタオル、体温計に携帯電話、充電器。トイレは根性。

寝込んで二日目、安芸からメールが来た。正直返すのもつらいけど、無視もしたくない。明日明後日は無理そうだけど、大丈夫だと返信した。すると、すぐに電話がかかってきた。

『明日明後日も無理って、そんなに悪いの？ 久坂？』

「あー、熱がまだね。でも薬もあるし、食事もとってるから。病院も行けるようになったら行くし」

『ひどい声……食事って、久坂の部屋なんにもないじゃん。何食べるの？』

「ゼリーとかだけど」

「全然大丈夫じゃないじゃん！ あたし今すぐ行くから」

俺はあせった。

「いや、ほんと。これで大丈夫なんだよ。あとは寝てればいいから俺はこのとき、言葉を間違っただろう。放つといて欲しいと、告げるべきだった。俺は本当につらいときは、放っておいて欲しいんだと。」

『ばか、どうして久坂はいつもそうなの？ あたしだって心配なんだよ！？ 待ってて』

でももしくは、言えなかったことが、すでに。泣きそうな声の安芸に、俺は口を閉じた。

意識がそんなにはつきりしてたわけじゃないから、それからどのくらいの時間で安芸が来たのかはわからない。でも、もう一度眠りに落ちたところで、インターホンで起こされた。合鍵は渡していなかったし、俺はきっちり鍵をかける習慣がある。しんどのいのおしでドアを開けると、大量の荷物を持った安芸が、俺を見て情けなく眉を下げていた。

安芸はなにか色々言ってたけど、多分俺はあとかうんとか言うてベッドに戻った。ともかく眠りたかった。

でも、食器の音がした。

「全部持ってきたの。すぐ、おかゆ作るからね」

がさがさ。がちゃがちゃ。かちゃん。袋の音にまじって、陶器のぶつかる音がする。

頭まで布団をかぶって耳をふさいでも、ねじこむように響いた。

安芸の作ってくれたおかゆを、俺はほとんど食べられなかった。弱っているときにあたたかいものを食べたことがなかったから、慣れていなかったせいもあるんだと思う。

その俺の様子を見て、安芸の心配はおさまるところじゃなく。大騒ぎして安芸部長を呼んで、車で俺を病院へ連れて行った。俺は点滴を打たれて、一日入院した。

ごめん。安芸、ごめん。

朦朧とする意識の中で、謝り続けた。俺は、安芸を嫌悪していた。

それをきっかけに、だんだんと安芸への気持ち冷めていった。認めたくなくても、認めないわけにはいかなかった。雨の日に機嫌が悪くなることも、自転車捨てたことも、前ならしうがないなあってそんな一言で済ませられたはずだったのに。

キスを避けてしまった時、もうだめだと思った。

安芸ももう25だから。俺がこんな気持ちなのに、ずるずる引き伸ばしたら安芸のためにもならないから。そんな言い訳をしながら、

安芸に別れを切り出した。安芸はうなずかなかつた。泣き続ける安芸に、俺はそれ以上押し通せなかつた。

ばかを承知で白状すれば、俺は、まさか自分の気持ち冷めるわけないと思ひ込んでいた。安芸を好きじゃなくなったことが後ろめたかつた。裏切つたんだと思つた。子供みたいだけど。振られたことしかないつてのはおそろしいね。モテると、恋愛がうまいのはまた別の話だつたわけだ。

安芸は、もう少し待つて、と言つた。俺もまた気持ち戻るかもしれないと思つた。それが、前のように戻れなくても、違う場所に行きつけるかもしれない、とか。

俺は仲のいい夫婦を知らないけど、世の夫婦が生涯恋しあうのかつていうとそれは違う気がする。始まりが恋でも、いずれかたちを変えていくんだと。

それなら俺は、恋人より家族がいい。激しくはなくても、一生一緒に続けられる、そんな情と関係がいい。俺の中で安芸への恋愛感情が終わつてしまつても、夫婦になればいずれは安芸のほうも終わつて、おだやかに落ちつく先があるんじゃないだろうか。

そんなことを願うのは、浅はかなんだろうか。安芸にはやっぱり、残酷なことなんだろうか。

まあ、結果を言えば無理だつたんだけど。がっかりしたね。俺は親と同じく、こうと決めたはずの人を大切に続けられなかつた。

終われない俺達は、ずるずると続いていつた。誰か他の人間が一緒にいれらうまくいつた。前のふたりのように、仲良く自然にいられた。ただ、ふたりきりになれば気まずく、だいたいの場合安芸が泣くはめになつた。

俺達は前にも増して、飲み会やみんなの参加できる遊びに参加するようになった。

小雨なのに無理に開いた花見で、俺は久しぶりに折原さんを見つ

けた。

どんちゃん騒ぎの対角で、花冷えの雨を眺めていた。黒のカーデイガンを羽織っけていても、冷酒を持っている手が真っ白で、冷え切っけて見える。

「折原さん」

「久坂さん。お久しぶりです」

「寒いでしょ。これどうぞ」

熱燗を渡す。駐車場にコンロを持ち込んだ馬鹿どもに乾杯。ビールシートじゃ地面からも冷えるしね。

「あ……ありがとうございます」

ほっとしたように笑ってくれる。会話はそれで終わり。俺はまた騒いでる連中に呼ばれて戻っていった。また雨だな、と思った。

そういえば、折原さんと初めて会った日も雨だった。俺のスーツの袖が濡れているのを見て、折原さんは小さなタオルを渡してくれた。それがなんとも、見事な吸水力で。あんまり便利だからどこで買ったのか聞いたら、そのタオルをくれた。親戚の家でもらったものだから自分はまたもらえるけども、どこで買えるかはわからない、入用なら親戚に確かめますが、と答えられた。仕事か。生真面目だなあと思った。

俺は折原さんのことをかわいいねーと思っていただけ、ねーとか伸ばしちゃう程度のそういうことであり、付き合いたいかという類ではなく。真面目で一生涯懸命で、少し不器用なことも知っていたから、会うたびに悪くなっていく顔色が心配だった。入社当時にお世話になったから（すぐに俺のほうがお世話してたけど。折原さんはもっと落ち着くべき）思い入れも親近感もあった。俺が見かける折原さんはいつもうつむいていた。仕事、うまくいっていないんだろ

うか。  
ホワイトデー、ついでみたいにもらったバレンタインチョコの

お礼に総務課に向かったとき、通路側のデスクで折原さんはくちびるを引き締めてうつむいていた。営業一課も総務課も活気があるのに、折原さんだけがうところにいる、そんな風に見えた。今たとえどんなに忙しくても、誰も彼女に声をかけないのだろうと。

気づかないふりで、声をかけた。

「折原さん、こんにちはー」

「……久坂さん」

そそくさと気まずそうに廊下に出てくる。ずいっと小さな紙袋を突き出した。最初に渡すつもりだったものとはちがう紙袋を。

「えっと、これは？」

「3倍返しのホワイトデーですが。期待してくれなかったの？」

「そんな、だってあんなチョコ一粒。逆に気を遣わせてしまってますみません。」

「こちらら、謝っちゃだめでしょう。」

「開けてみて？」

「ここで？ 目で聞いてくる。俺はそれくらい許される仕事場だと思っただけどこはちがうんだろうか。彼女は包みを開いた。どうだ。」

「ぶっ」

折原さんが吹き出した。口元をおさえる。お、そんなに笑ってくれます？

「あ、あはははっ、だめこれブサイクすぎる……」

「でしょー？ どの国から来たんだおまえって思っじゃない、したらそれ」

「メイドインジャパン!？」

「そーなんだよ、もーおかしくって」

だから、自分に連れて帰ろうと思っただけだね。

「もう、おなか痛い……すみません。ありがとうございます、久坂さん」

「ていねいに、とていねいに折原さんはお礼を言う。でもさ、

喜んでくれるだけで十分にお礼だよね、こづいうのって。俺はいい気になりましたよ。

「ありがとうございます。……ありがとうございます。なにか、お礼をさせてください。えっと」

折原さんがデスクを振り返ったのが、携帯を探したんだと気づいたから、

「いいよ」

思わず、少し強くなってしまった。またこっちを向いた折原さんが目をぱちくりさせて俺を見る。

「お礼のお礼になっちゃうでしょー。ほんとたいしたものじゃないし、気にしないでひょーいと受け取っておいて」

我ながら笑顔がうそ寒い。折原さんがぎこちなく笑い返した。ああ、気づいちゃうのか。そんなに鋭いのに要領が悪いんじゃないだろうなあこの人。

「そうですか。その……でも、ありがとうございます。本当に、うれしかったです」

って、まだ礼を言っちゃうのか。俺に怒りもしないのか。本当にただ礼をしたかっただけだったなのか。どっちにしてもだめだけど。折原さんがどんなつもりでも関係なくてですね。俺がだめなんです。またね、って言ってそそくさと総務課をあとにした。いやでもほんとは。

折原さんの連絡先はだめだ。

ってこう思っちゃった時点でアウトだよなー。安芸ごめん。それでも安芸一筋ですから。ねえな！ 我ながら！

今からでも言えばいいんだろうか。俺は食器が苦手なんだって。つらいときは放っておいてほしいんだって。雨を嫌われるとへこむんだって。いらぬものをぞんざいに捨てないで欲しいんだって。そうしたら、どうして、って安芸は聞く。きつと、心配そうな目で。当たり前だよな。

そして俺は、親のせいだって答えるのか。

無理だ。

気持ちが悪くなった。

そうじゃない。たいしたことじゃないんだ。俺は親を憎んでるわけじゃないし、親も別に俺を憎んでるわけじゃない。確かに溝のある家族だったしそれを埋める努力もしなかった。金に困っていないと知っていても、進学に金を出して欲しいと言いつつ出せない程度の仲ではあった。頼ってたまるかと意地になる気持ちもあった。でもそれだけで、なんとというか、それだけで終わらせたいことで。

あんまり騒がないで欲しい。重く受け止めないで欲しかった。でも安芸は多分できない。心配、してしまう。

そうか。だから俺は安芸に頼れなかったのか。年下だからかもしれないし俺がまだまだだからかもしれないけど、ともかく、俺は安芸を頼ったことがなかった。

営業一課もいる飲み会に参加した。総務の人はいつも通りひとりもいない。つまり折原さんもいない。酔っぱらった営業一課の小川君にちよつと聞いてみた。

「ねえ、折原さんって具合とか悪いの？」

「え、そうなんすか？」

「たまに見かけるんだけど、いつつもうつむいてるからさ」

「そういう人なんじゃないですか？ 会社嫌いなんでしょ、そんな顔してるじゃないすか。あー俺も辞めてーなー」

と言うわりにげらげら笑ってチューハイをあおる。

「でも、田村さんと総務主任さんにいつつもいじめられていますから、あれはかわいそーですよね」

「え、いじめ！ かつこわるい！」

「ねー！ いや知りませんが、怒られまくってますよ。でもずるいんですよ、田村さん。俺だって折原ちゃんに仕事頼みたいのに、俺が頼むと怒るんすよ」

「なんで？」

「折原ちゃん、面倒なこと文句言わずやってくれますからね。ほら総務って他は気の強い主婦ばっかでしょ。てか散々いじめるくせに、都合いいときは使っただから田村さんずるいっすよー」

「ふーん……」

小川君はたまっていたのか、そこから田村さんの愚痴が怒涛の勢いで始まった。なついていると思うけど先輩は先輩だしそんなもんならだろう。そーかそーが大変だーって相槌を打つ。

途中まじった一課の連中からもちよつと話を聞いて、でもそこまです折原さんに興味がないのかすぐに田村さんや課長の話題に変わった。盛り上がりだしたところで別の席にいた田村さんが「俺の悪口が聞こえたぞためえら！」と怒鳴り込んできてはい爆弾どーん。俺田村さん好きだなあ。

嫌ってる、ねえ。それは本当なんだろうな。田村さん、美人やかわい子やできる女の人が好きだし。折原さんみたいなタイプは苛立つんだろう。ただ、田村さんの行動を聞いてみると、それだけじゃないような感じもする。

「ず、ずるいつすよ久坂さん、あつという間に安全地帯でー！ 田村さん、久坂さんだつて田村さんの悪口言つてたんっすよ！」

「え、ほんと？ どんな？」

初耳だつたんで驚いて聞き返すと田村さんが小川君を殴つた。

「あー、えーつと、そうだほら！ 田村さんが折原ちゃんいじめてるつて言つたら、田村さんひどいって言つたじゃないっすか！」

「おまえなに話してんだ馬鹿か馬鹿なのか一度死ぬか」

「久坂さんが聞いてきたんすよー！」

あ、それなら嘘じゃないね。

「久坂が？ へえ、久坂おまえ折原なんかに興味あんのか。あれじや安芸も張り合いがなさすぎるだろうな」

「おやあ？ 酔っているくせに、酔っているからか、田村さんの目尻が少し吊り上がる。口元は笑っている。凶悪。」

「そうですねえ」

目を見返して、笑う。田村さんは眉を上げ、すぐに根に寄せた。気まずそうに。そしてすぐに別の話題をはじめた。

これだけで、安パイの俺にすごむんだ。俺が安芸部長の娘と付き合ってるのは周知の事実。飲み会によく誘われるのはそのせいもある。彼女持ちだし将来のコネかもみたいな。

どっちに転ぶのか、田村さん自身わかっていない、ってところのかな。

だってあれだよ、折原かわいいでしょ。このおねいさんどうしてくれようって毎度思う。なんでみんなほっとくんだろ。まあそのうち誰かが手を伸ばしたとこで田村さんがあわてて引たくりにくるに1票。次の機会、田村さんの前で折原って呼び捨ててみたらこっち見てた。

俺も安芸のこと、かわいって思ってたんだけどな。喜ぶ顔が好きで。一緒にいて楽しかった。今だって大切にしたい。本当に、一番、大切にしたい。でもそこに恋はない。安芸が欲しがるとそれはもう消えてしまって、俺は見つけられずにいる。そうと伝えても、もう触れ合わなくなっても、安芸は俺と一緒にいたいという。

田村さんが折原と休日に出かけたと聞いた。いったいどこから漏れるんだろうそというの。田村さん、絶対内緒にしそうなのにな。

折原、いいんだ。田村さんのこと苦手なんだと思ってたけど。人の気持ちは変わるんだろうか。変わるよな。俺自身変わったんだから。

安芸の家に呼ばれた。遠回しな結婚の話に驚いた。でも、目線を合わせない安芸にすぐに事態に納得した。

安芸の家族が好きだ。安芸のことだって、嫌いになつたわけじゃない。俺はもう戻れないところにまで来ているんだろ。なにかを言うなら、安芸がこんな手に入る前につき離すべきだった。俺は結局、安芸の家族に嫌われたくなかったし、安芸も傷つけきれなかつ

た。いつそ結婚してしまえば覚悟も変わるのかもしれない。いずれにしても今の事態はもう限界だった。俺も安芸も。

婚約指輪は安いものじゃなかったけど、どうせ貯金はあった。金使わないから。安芸ははしゃいでいた。空元気なのは伝わってきた。いつかこれがまた本物に変わるんだろうか。変わってくれなきゃ困るんだけど。ほんと、世の夫婦はどうしてるんだろ。俺と安芸がどう思おうが指輪は本物で事態は進んでいく。

夏のある日。社員食堂で折原を見かけた。髪型違うのは二度目だけど、これはこないだの成り行きでぐちゃぐちゃになったのとはちよつと違う気がする。ぴんときた。いかんこれは声をかけねば。てかあれお弁当みたいだし。

折原と話していると楽しい。居心地がいい。これが浮気だとして恋心だとして、でもそれは以前に安芸に感じていたものとどれだけ違うんだろう。まあいいや。俺の指には銀の指輪がはまっている。流れで、親の話をした。飯を作らない人だったと。他意はなかったし、そんなに重く話したつもりもなかった。

「久坂さんは、元気でしたか？」

折原の目と、声が、俺を探っていた。俺がこの話をどうしたのかを知ろうとしていた。だから俺は、笑えた。とてもおだやかに。うん。

「元気だったし、今も元気だよ」

折原は笑った。ほつとしたように。うれしそうに。

俺ははじめて、自分はこうして欲しかったんだと知った。

ちよつといろんなことを置いておいて、窓に降る雨を見る。どうでもいい会話を交わす。俺、もう折原に会わないほうがいいなあ。って思ってたら折原の爆弾ポイ。

なんとというか、自分に「へえー」って思う。俺、折原のこと多分

ほとんど知らないんだけど。安芸の家や会社と縁切るようなことになった場合、大学と会社くつついてる俺の人間関係まるっとなくなるんだけど。家族はいないようなもんだしこれ系で再就職狙うにしても業界狭いし。そこらへんががごと頭に浮かんで、でもま、いつか！ っとなった。

えーっと、浮かれてた、のかな？ 誰だ俺のこと慎重な人間って思ってたの。俺ですが。

勢いのまんま安芸の家に謝りに行って安芸に怒鳴られて。ティッシュくらい当てればよかったのに。意外と運動音痴だからだめか。それとも、わざと外したのか。ごめん、安芸。

俺、多分どこかで恨んでた。俺のことを理解できない安芸のこと。話せばよかったのかもしれない。言葉を尽くすべきだったのかもしれない。でも、付き合っただけで安芸を知ってから、無理なんだって思ってしまった。

折原だったらうまくいくのか。わからない。てか俺が安芸を振って行ったらドン引きしそうだよねあの人？ だったらなんで俺にそんなこと言ったのと思うけど。とりあえずなんで連絡つかないのかなー田村さああああん！

でも田村さんより折原本人のほうが難関でした。振られたと思って一ヶ月過ぎた。それでも、どこかですつきりしている自分がいた。折原が家に来たときはすぐには喜ばなかった。この人、振るためだけでも律儀に来そうだし。でも意外と、読めてなかったなあ。というか、俺はほんと、折原のこと読めていない。なかなかどうして。

折原と一緒に過ごすようになってしばらくしてから、食器のことを話す機会があった。

折原の作った食事を食べるのは好きだったけどやっぱり家つて場所ので聞く食器の音はちくちくした。外は平気なんだ。知らない人のいる空間は。

食器の音、苦手なんだよねえって言った。そしたら折原は、少し首をひねった。

「陶器やガラスの音ですか？」

「え？ ああ、そうかな」

「プラスチックや紙は？」

「平気」

壊れないものは。折原は、自分の食器棚を見た。

「食器、入れ替えてもわたしはかまわないんですけど。もう古いし。そういうのは、いやですか？」

少ないからプラスチックなら3万くらいで揃えられちゃいそうだとか、ぶつぶつ言い出す。

「いやいや、そこまでしなくても大丈夫」

「気に留めておくだけでいいですか？」

「……あ。うん。それがうれしいかも」

「はい」

折原は笑ってうなずいた。

安芸はまだ泣いているらしい。このあいだ、こっちに戻ってきた数人さんにちよいちよいつとやられた。性質の悪い計算天然だつて言われた。言い返さなかったけど数人さんは正直な二枚舌だと思う。多分、俺に伝えてきたこと、うそじゃないけどまんま本当でもないはずだ。いいひとなんだけど時々勝負してる気になるのはなんでだ。

「俺、洗うよ」

「え、いいですよ。座ってて下さい。だって、食器」

「そのうち慣れるでしょ」

慣れたいと思ってるし。折原からエプロンを外して（紳士的に）、

自分につけて流しに立つ。

「自分の台所、使われるのって、結構恥ずかしいんですよ……久坂さんにはわからないでしょうけど……」

「うん、全然わかんないわー。もじもじしててもいいよ」

スポンジに洗剤をつけてやっつけだす。そろそろ水も冷たい。洗剤自体は実験でよくやるし、慣れてる。本当に気持ちや気分だけの問題なんだってよくわかる。

「うお」

折原が抱きついてきた。おどろいた。

「どしたの？」

「久坂さんの白衣やエプロン姿が好きなようで」

「……えっと、終わるまで待ってね？」

「ちがいます」

「あちよつと食器落とす！ほんと！」

本気であせった。手えふるえちゃうじゃない。

「水曜にですね」

「うん」

「……田村さんにですね、笑いにされてまして」

「え？」

田村さんに？ 振り向こうとすると、折原は首を振った。

「わたし、携帯の電話帳の登録が……34件しかないんですが」

ちよつと絶句した。

「田村さんが営業一課内ですね、大声で、『おい電話帳34件しか登録のない折原！』って叫びまして」

なにやっつてんだ田村さん。そしてなんで知ってるんだ田村さん。

「……営業一課のみなさんに、笑われて」

「……まあ、笑ってくれたなら、よかった方じゃない？」

「はい」

折原の手に力がこもる。

「その、怒ってたんですが……翌日から、妙に営業一課の人達に笑

って挨拶されてまして」

ああ。

「田村さんは、すごく……腹立たいですが。でも、少し、楽しかったかなって」

多分、折原は今笑ってるんだろう。

「そっか」

手が泡まみれじゃなかったら、頭わしわししたいところなだけで。田村さんには貸しがたまっていく気がする。早く返さないと怖い。御礼とか言ってるうちに持っつかれそう。俺持ってきちゃったし前科持ち。

「久坂さん、終わったらDVD借りにいきませんか」

折原は最近、レンタルDVDにハマっている。俺が持ってた映画のDVDは見尽くしてしまった。

「今週の折原の挑戦。最終巻のひとつ前だけ3週続けてないとか、間が悪過ぎて折原だよな」

「うるさいですよそんなの挑戦じゃないです。久坂さんが借りたいやつばかりあるのはなんでですか？ 人気の新作も一本だけあるとか。どうして？ わたしが雨女だからですか？ ……また曇っってきてるし」

「俺はそれより、折原の無趣味っぷりに驚いたんだけどね……」

テレビも見ない本読むわけでもない、時々テレビで流す映画は見えないけど。定時に帰るくせにほんとなにして過ごしてきたんだろ。聞いても、なにもしてないような気はしないけど言うほどのこともしてない、とかなんとか。首をひねられた。

「……今日もなかったらどうしよう」

「また来週いけばいいんじゃない？ あれなら買っちゃえば」

「もったいないですよ！ それに8巻だけ持ってるとか落ち着かなくありませんか」

「そーだなー」

折原は俺から離れて、窓をのぞく。それから玄関に行つてなにか  
「ごそごそやりだした。」

「あ、新品だ」

「だからその目ざといのやめてくださいってば……」

箱から出した、黄色のレインブーツ。

「でも雨まだ降つてないよ」

「なんか降らない気がしてきました」

楽しみにしてるからか。笑ったら怒られた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5422z/>

---

あめおんな番外編：雨雲の向こう側

2011年12月18日09時53分発行